

結婚の神様

櫛木理宇

第一回

プロローグ

やっぱり家で寝てればよかった——と女はうんざりしつつ思った。だいたい結婚式だの披露宴なんて、親しい友人か近しい親戚が挙げるのでない限り、面白くもなんともないのだ。

他人の白無垢しろむくなんてどうだっていい。興味ない。おまけに長ったらしいスピーチ。退屈きわまりない余興。見たくもないお色直しに、白じらしい花束贈呈。

——せっかくの日曜をつぶされた上、ご祝儀まで出させられるなんてさ。ほんっと最低最悪。

女は足を組みかえ、ティーラウンジの窓から望める景色を横目で

睨にらんだ。

楽しみと言えるのはせいぜい食事くらいだが、あの渋ちな支店長のことだ。品数や質を落とし、一円でも安くあげようと悪あがきしたに決まっている。下手をしたらキャビアやフォアグラどころか、海老えびの一匹すらお目見えしないコースかもしれない。

すでに神前式の用意がなされた中庭は、いまがさかりの桜でいちめん薄紅に煙っていた。

大山桜おおやまびくろ、普賢象ふげんぞう、御室有明おむろありあけ、糸括いとくくりと種類しゅるいごとに濃淡を見せ、白に、あるいは桃ももに曙あけぼのいろに霞かすみ、庭そのものが一人の花嫁御寮ごりょうと化して花衣をまとったかに映る。

庭の桜や滝とともに撮影できるよう、池に向かってU字形にせり出した芝生には、金屏風きんびょうぶを背にした白木の八脚案はつきやくあんや雪洞ほんぼりが設置済みであった。

新郎新婦のためには錦布おおで覆った黒塗りの専用椅子がふたつ用意され、列席する客のためには白布を張った胡床こしよつが並べられている。とうに緋毛氈ひもうせんも敷かれ、八脚案には三宝さんぼうや盃さかずきも準備されて、あとは人を呼ぶだけといった様子だ。

——最悪だけど……。ま、この眺めだけは評価してやってもいいかもね。

女は内心でつぶやき、クラッチバッグを探った。煙草を取りだし、

一本くわえて火を点ける。

ここ『青扇殿』は、県内でも最老舗しにせのブライダル会館である。

売りはなんといつてもこの絢爛けんらんたる庭園だ。春には桜、夏は茂る

緑と水蓮すいれん、秋なら紅葉、冬には寒椿と、季節ごとに違った顔を見せてくれる。

また経営者を同じくするハイグレードな旅館が隣接しており、披露宴の招待客が優先的に泊まれるシステムになっているのも人気のひとつであった。

「ドレスでチャペルウェディングがしたいならホテル・アンジェレノ。神前式の白無垢で決めたいなら青扇殿」

が、地元で生まれ育った適齢期女子たちの共通認識と云っていい。ちなみに彼女はまだ、そのどちらでも式を挙げてはいなかった。ついでに言えば相手も見つかっていないのだが、しいて言うならばアンジェレノ派である。

——けど青扇の神前式も悪くないじゃない、ねえ。

紫煙を両の鼻孔から吹きだしつつ、そう思った。

バブルが弾けたと言われて丸一年経つが、まだ身に迫って景気の低下を感じたことはない。

そりゃあ確かに失速してはいるのだろう。だけどそんなのは不動産を買いあさったり、証券だか株だかでマネーゲームしていた一部

の金持ちの問題としか思えない。

道行く女の子たちは相変わらず最新流行のブランドバッグを持ち歩いているし、スキーリゾートは夏前から予約で一杯だし、同僚は経費でほぼ毎晩飲み歩いている。お正月にハワイへ行った子たちはお土産にシャネルの口紅をばらまいていたし、彼女の弟は夏のボーナスを頭金に、新車のセドリックかグロリアを購入する予定だ。

——そんなご時世だもん。一生に一度の式くらい、ぱーっと豪華にやんなきゃ嘘よね。

なのにはんと可哀想、と女は煙を吐いてひとりごちた。

——新婦の子、高校卒業したばかりらしいのにさ。

ろくに遊べもせずに、親の決めた相手と結婚なんてマジ可哀想すぎ。おまけに相手は二十歳も上のハゲ親父らしいもんね。ご愁傷様しゆうしょうさまとしか言いようがないわ。

——けどそれを言うなら、あのケチ支店長の娘に生まれたって時点でご愁傷様かな。

女は口の端で苦笑した。

ただのケチならまだ救いがある。だが見栄っ張りでケチともなると、もうどうしようもない。

たとえば式と披露宴をこの青扇殿に予約しておいて、
「すまんねみんな。再来週はうちの娘の結婚式なんで、ぜひ出席し

てくれるか。あ、もちろん御祝儀を出してくれるぶんにはやぶさかでないからね。ドレスは黒禁止、振袖歓迎。男はなるべく車で来るように。え？ もちろん、ゲスト様の送迎に使えるような車でだよ？」と真顔で言い放つような男が父親だったなら、救いなど一片もないに等しい。

そこへ持つてきて、母親は夫の言いなりの腹話術人形みたいな女だ。会社主催のバーベキューパーティーで会った支店長の妻は、白髪だらけで化粧ひとつしていなかった。

あとでまだ四十代だと聞いて、同僚ともども驚愕きょうがくしたものだ。紙屑を寄せ集めて作ったような、およそ精気も生氣さいくんもない細君であった。

—— 一世代前ともなると、なんだかあたしらと同じ女じゃないみたいよね。

そういえばうちのお母さんもあんな感じだなあ、と彼女は思う。地味づくりで、いつも夫の顔をうかがって、酒煙草なんてとんでもないって顔して、お兄ちゃんはやかすくせに、娘のあたしにだけぎゃんぎゃんうるさい母親。

たまりかねて一度、

「なによ、自由にやれてるあたしに嫉妬しつとしてんの？」

と煽あおってやったら、凶星あおだったみたいで真っ赤になってヒスって

たっけ。

——ああ、やだやだ。やなこと思いだしちやった。

女は煙草を灰皿にねじりつぶした。

だいたい、待ち時間が長すぎるのがいけないのよ。式は十一時からはずだったのに、もう一時間半も遅れてるじゃない。プランナーのせいかスタッフのせいか知らないけど、ちよつと段取り悪すぎるわ。

——それに、さつきからやたらざわざわしちやってさ。

「老舗の会館のくせして、なにをばたついているのよ、まったく……」

鼻で笑って、女はラウンジのソファから腰を浮かせた。

途端にドレスの腰まわりの布地と、ファスナーの付け根が悲鳴をあげる。

女は顔をしかめた。買った当時から六キロ増えたというのに、なにくわぬ顔で着こなすのはやはり無理があっただろうか。

今日一日なんとか持ってちよつだいよ、と生地とファスナーを叱咤しつゝ、化粧室へと向かう。

突き当たりの化粧室はなぜか混んでいた。

しかしよくよく見れば、行列ができているわけではない。スタッフらしき制服姿の男女が通路の前で右往左往しているだけだ。

「ちよつと、どいてよ。なにあんた痴漢？」

制服の男を手で押しつけ、女は前へと進んだ。

女性スタッフが狼狽顔ろうばいで振りかえり、彼女を押しとどめようとする。しかし女はその手を逆にはねのけ、

「なんなのこの会館。段取りも手際も悪い上、客にトイレも使わせないってわけ？ まったく青扇殿の名前も地に落ちたわねえ。こんなよそで言いふらされたらまずいんじゃないの？ 言っとくけどあたし、お金ないけど人脈はあるのよね。あ、やめてよ。触らないでくれる。ドレスに手の脂が付いちやうじゃない。もし汚れたらあとでクリーニング代請求するからね。あんたの顔、もう覚えたからね」

まくしたてながら、さらに歩みを速めた。はからずも思いだした母への苛立ちいらだが、日頃の強引さへ拍車をかけていた。

「お客様、あの……」

「どいてよ」

最後に立ちほだかったスタッフを手で突きつけ、女は中へ一歩踏み入った。

まず目に入ったのは、床の白灰色のタイルだった。

次いで赤が目に入る。

——ううん、違うわ。

これはただの赤じゃない。目に痛いほどあざやかで、そのくせ奇

妙に生なましい。奥の個室のあたりから、濃い粘っこい赤が流れて、
タイルの溝に広がって。

それに奥の個室が、なにかおかしい。

戸の上部からなにか、ぶら下がってやしないだろうか。やけに重
たげなそれが、戸にもたれながら、赤の広がるタイルへ影を落とす
て。そう、ちょうど人ひとり分の長さがある、裾の長い着物をまと
った影――。

女は悲鳴を放った。

悲鳴は長々とつづき、いつ果てるともなく式前の会館に響きわた
った。

第一章

1

「お疲れさまです。お先に失礼いたします」

カードを手にタイムレコーダへ殺到する男性社員たちへ、合路咲
希はにっこり笑って会釈した。

白のブラウスにアプリコットベージュのタイトスカート、同系色
でまとめたパンプスと革のトートバッグ。上品なハーフアップにま
とめた髪に縁どられた笑顔は、アーモンド形の二重の目といい、高
い鼻梁といい、ふっくらした唇といい、非の打ちどころがなく美
しい。

声をかけられた男性社員たちが、その場で凝固した。ある者は声
を詰まらせ、ある者は赤くなり、ある者は目を潤ませて、うわずつ
た声をあげる。

「お、お疲れさま。合路さん」

「お疲れさま、また明日」

咲希は去り際に笑顔でもう一礼し、今度こそきびすを返した。そ
の背中に、男たちのため息まじりのささやきが突き刺さる。

「……やっぱりいいなあ、合路さん」

「今日も一分の隙なく完璧だな」

「彼氏いるのかなあ、いるに決まってるよなあ」

そんな慨嘆がいたんなど耳に入っていないふうを装いながら、咲希はしつかりと耳をそばだてていた。そして内心で固く拳を握った。

——よし、新作のアイシヤドゥとリップグロス、男受け上々。

それさえ確認すれば、もはや会社に用はない。窮屈なヒールを脱ぎ捨てたいのをこらえ、彼女は優雅な足取りで階段を一步一步下りていった。

行きかう社員たちへ平等あいさつに挨拶し、笑顔を向け、最後の一瞬まで気を抜かずオフィスビルを出る。

会社で愛想をふりまくのは、べつだんモテたいからではない。むしろ逆だ。そのため社内では咲希は「つねに公平に、平等に」をモットーとしている。男女のわけへだてなく、年齢も立場も関係なく、咲希は誰にでもやさしく礼儀正しく接する。

「おれにだけ、わたしにだけやさしい」
などと思われ、誤解されてはたまらない。感情面の誤解はいらぬトラブルを生む。そしてトラブルは、野望から彼女を一步も二歩も遠ざける。

咲希はいつも帰途に使っている巡回バスに乗りこんだ。

オフィス街を出るまでは窓の外へと完璧な横顔を見せつけつづ
け、『次は市民病院前、市民病院前——』のアナウンスを聞いたとこ
ろで、一気にだらけた。

肩をまわし、首をぽきぽき鳴らす。ヒールを脱いでバッグに常備
したフットカバーを履き、椅子の上へ横座りになる。

退社寸前にぼつちり直したメイクと髪型だけは崩れぬよう十二
分に留意しつつ、彼女は背もたれに寄りかかって盛大に脱力した。

バスが市民病院前の停留所で止まる。

バスカードを片手に前方の扉から乗りこんできたお年寄りたち
が、咲希を見て口ぐちに声をかけてきた。

「やいや、咲希ちゃん。いまお帰りだかね」

「見るからにお疲れなのう」

「そうなのよ、お疲れなのよ……」

優先席へ順に座りこむご老人たちへ、咲希は肺から息を絞り出す
ように応えた。老婆二人が入れ歯をもごつかせながら、

「だいたい咲希ちゃんは、キャラ作りすぎなんらて」

「見なせ、顔が半分死んでるでねえの。シロちゃんに会う前に、も
うちつとましな面付きついでに戻しておきなせやれ」

「大丈夫。それまでには必ず顔面を復活させる。ご心配ありがと

……」

老婆たちからガムや飴あめをもらいながら、咲希はヒールのせいうめで痛む腰に手をあてて呻いた。そしてバスの降り際には恒例の、

「結婚式には呼ぶからね。おじいちゃんもおばあちゃんも、みんな来てね」

の挨拶をふりまいてから、コンビニ前のバス停に下り立った。

このコンビニから咲希の実家までは徒歩一分弱の距離にある。彼女が自動ドアをくぐってまずすることといえば、レジに立つ顔馴染かおなじみの店長に、

「おじちゃん、シロちゃんまだよね？」

と訊くことであった。

おじちゃんは鷹揚おうようにうなずき、「まだだよ。あ、ヤンマガの新しいの出てるよ」と返答した。咲希は店長に礼を言い、メイク落としシートと『ヤングマガジン』を購入した。

そうして清算を終えた彼女は、ただちに窓際へ貼りついた。

そのまま待つこと十五分。ややくたびれたカラーラアクシオが、角の赤信号で停まるのが咲希の視界に入った。

「来た！　じゃあねおじちゃん、ありがとう！」

言うが早いか、咲希は店を飛び出した。

この角の信号は長い。徒歩であっても走ればゆうゆう先回りできる。

咲希は二軒隣の門柱前で急ブレーキ気味に止まると、カーポートに駐まった車のサイドミラーを借りて、己の顔面の具合を確認した。

バスで「半分死んでる」と評された顔を意志の力で引き締めた。前髪を手櫛でとのえ、顎を引いて背すじを伸ばす。

赤信号を抜けたらしいアクシオが、角を曲がって向こうからやって来た。

さも「いまちようど帰ってきたところ」というふりをして、咲希は通勤用のトートバッグを肩へ掛けなおしてゆったり歩きだした。歩幅を慎重にはかる。アクシオの主が車庫へ愛車をおさめて出てくる瞬間に、寸分狂わずぴたりと合わせる。

「あ、シロちゃん。お帰りなさい」

はじめて気づいたような顔を作って、片手を振った。

「おう」

お隣の「今居さんちのシロちゃん」こと史郎が、無愛想に短く応じる。やや猫背気味の姿勢で、長い足をもてあますように歩いてくる。身長一六七センチの咲希から見ても、見あげるほどの長身だ。

「き、今日はお仕事どうだった？ 忙しかった？」

「まあぼちぼち」

「そういえばヤンマガ買ったよ。今日中に読むからね、明日届ける

から」

「ああ、サンキュ」

眠そうな顔でうなずいて、

「じゃあな。そっちもしつかり休めよ」

と史郎が背中越しに手を振る。

彼が庭の飛び石を踏み、今居家の玄関扉を開け、その向こうへ姿を消してしまうまで咲希はその場に突っ立って見送っていた。

やがて派手なくしゃみが出て、はじめて夕刻の冷え込みぶりに気づく。身を震わせながら、咲希は小走りに自宅へと駆け込んだ。

「ああお姉ちゃん、お帰り。無事シロちゃんと会えた？」

居間へ入るなり真っ先に声をかけてきたのは、今年大学生になった妹の香耶^{かや}だ。

「ばっちり」と答えた姉へ、

「まったく……。本日もストーカーご苦労様です」

とわざわざ畳から起きあがり、嫌味ったらしく三つ指を突いて頭を下げてくる。

「ストーカーとはなによ、人聞きの悪い」

咲希は頬^{ほお}をふくらませた。

「乙女心をちよっぴりこじらせてるだけよ。妹ならあたたかく見守りなさいよ」

「言われなくても、生まれてこのかたもう十八年も見守ってますが」

と香耶は反駁はんぱくしてから、視線を宙に据えて指折り数えはじめた。

「いや違うか、あたしが生まれる前からだっけ？ シロちゃんがお隣に越してきたのが六歳のときらしいから……あ、やっぱ十八年か。あらためて考えなくても長い片思いだよねえ。十八年経たちや新築の家だつて査定額は半分以下になるし、十六歳でデビューしたアイドルも三十四のおっさんになるっていうのにさ」

「なんでそこで家やおっさんが出てくるのよ」

憤然ふんぜんとする咲希へ、

「お姉ちゃん、帰ってきてるの？ 今夜はハンバーグだけど、あんた何個食べる？」

と台所から母の声がかぶさる。

咲希はすこし迷って、

「七個——うーん、やっぱり六個！ 六個にしとく！」

「六個ね。あとでやっぱり七個とか言うんじゃないわよ」

わかった、と咲希は返事をし、妹にコンビニ袋を放って洗面所へ向かった。

そして十数分後。

戻ってきた咲希は、茹ゆで卵を剥むいたようなすっぴんであった。前髪を百均のダッカルで留め、上下ジャージに綿入れ半纏はんてんというスタイルでいそいそと食卓に着く。

「いただきます」

「いただきます」

食事前には必ずこれを家族全員で唱和するのがお決まりだ。

テレビは点けず、もちろんスマホや新聞の閲覧も厳禁である。たとえお茶漬け一杯であつても、食事には真摯しんしに取り組むべしというのが合路家の家訓であつた。

「お父さん、今日も遅いの？」

煮込みハンバーグをばくつきながら咲希が問う。

「遅いでしょうね。あつ、あんた、どさくさにまぎれて七個目にいくんじゃないわよ。お父さん、食べてくるかどうかかわかんないんだから」

「ねえお姉ちゃん、あのヤンマガ部屋持つってってもいい？」と香耶。

「いいよ。けど、わたしがお風呂入ってる間に読んでよ。わたしも読むんだし、明日にはシロちゃんの『ヤングジャンプ』と交換してもらうんだから」

と答えた咲希に、香耶が聞こえよがしのため息をついた。

「なによ、その切なそうなりアクションは」

「いやね、姉ちゃんを見てると、ほんと健気けなげとストーカーの境目がわからなくなるなああって……」

香耶は味噌汁を啜すって、

「朝晩たった一分あるかないかの挨拶のために精魂こめてフルメイクして、いずれ実現すると信じてる架空の結婚式のためだけに会社で才媛を演じて、高校卒業するまで部活で真っ黒に日焼けしてたくせに、大学デビューした途端やれ美白だ最新メイクだって大騒ぎして……。それもこれも全部、一瞬すら付きあっていない男との結婚を夢見て」

「いいじゃない。わたしの勝手でしょう」

咲希は叫んだ。

「だって万全のコンディションで白無垢とドレスを着たいんだもの。会社の人たちにスピーチで誉めまくってもらいたいんだもの。友達と近所のじいちゃんばあちゃんには地を知られてるから手遅れとしても、シロちゃんに『こいつと結婚して正解だった』って思ってもらいたいんだもの」

「いやいや、そのシロちゃんだって、とっくにお姉ちゃんの地を知ってるじゃん。なにしろ小中高大と同じ学校だったんだからさ」

「だからじゃない」

飯茶碗を置き、咲希はさらに妹へ反論した。

「十八年間ずっといっしょにいて、付きあえなかったのよ？ つまりそれって学生時代の延長のままでしたら、一生女として認識してもらえないってことじゃない。ここはわたしの違った一面を、大人

の女となったわたしを見てもらわなきゃいけないじゃない。あれよ、ギャップ萌え^もってやつを狙うのよ」

香耶が隣に座る母と顔を見合わせ、吐息をついた。

「もうね、わが姉ながらつくづく……。お姉ちゃんって、素材はいんだけどねえ。顔もスタイルもいいんだけど、いかんせん中身が微妙というか……。かもしだす空気からして違うわ。一言しゃべって、動いた時点でわかる。モテない女のオーラを全身から発してる」

「やめてよ」

咲希は気色^{けしき}ばんだ。

「なぜあんたはそうやっていつも、事の本質を突こうとするの。人を傷つけることにためらいがないの。もうちよつと言葉をオブラートに包みなさいよ」

「はいはい、きょうだい喧嘩しないの」

母が割って入った。咲希が泣きべそ顔で言う。

「だって香耶が」

「そうね、香耶ちゃんがよくない。香耶ちゃん、お姉ちゃんをほつといてあげなさい。言ったって無駄なんだから。二人とも早く食べ終えて、お風呂入っちゃいなさい」

「はい」

香耶がおとなしく返事をする。咲希は飯茶碗を持ちなおし、

「みんな冷たい……」

とぶちぶち言いながら七個目のハンバーグに箸を伸ばそうとして、思いきり母に手を叩かれた。

2

入浴前の儀式として、咲希は自室で『ロッキーのテーマ』を流しながらの腕立て伏せ五十回と腹筋三十回をこなすのが日課だ。

一汗流したことに満足し、バナラ味のプロテインをたしなんでいると、襖ふすまの縁を外から数回ノックする音があった。

「はい」

「お姉ちゃん、話があるんだけど」

と入ってきたのは香耶だ。

読み終えたらしい『ヤングマガジン』を右手に携え、もう片手には何やらパンフレットらしきものを持っている。

咲希は眉根を寄せた。

「え、なに？ 宗教とかやめてよ。大学でそういうの勧誘される子多いけど、ほんとやめてよ。うちのクールな香耶ちゃんに限ってと思っていたのに」

「違うってば。ただのバイトの話」

クッションを引き寄せて妹が正面へ座る。

思いがけない単語に、咲希は目をしばたいた。

「バイト？」

「そう。お姉ちゃん、『このペースじゃ貯金できないし結婚資金が貯まらない』『うちの会社は副業禁止じゃないから、運送屋のバイトでもしようかな』って前に言ってたでしょ？ 今日サークルの先輩からこのバイト紹介されて、ああこれ、あたしよりお姉ちゃんに向いてるわって思ったの」

そう香耶が渡してきたパンフレットに、咲希は目をすがめた。

「……ええと、『ブライダルスタッフ募集 株式会社チェリーブラッサム』『あなたも披露宴の、華やかなゲストになってみませんか』『完全日給制、衣装メイク要相談、契約更新有り、労災保険の実績有り』——って、なにこれ」

「ま、ありていに言って、結婚式とか披露宴のサクラ」

「サクラ？」

咲希は鸚鵡返しにした。

まず花の桜が頭に浮かび、次に寅とらさんの妹が脳裏をよぎり、次いでようやく、〃やらせ役〃を意味する言葉に思いあたった。

「結婚式の——え？　なんで？　だって、式——え？」

咲希は戸惑った。

彼女にとって結婚式は神聖なものである。愛し合う二人が永遠の愛を誓い、親や友人たちに心から祝福してもらう儀式。そして新たな人生へのページを刻むための区切りでもあり、一世一代の花道でもあった。その花道にまたどうして、やらせ役などが必要なのだろうか？

香耶がこめかみを揉みながら、

「お姉ちゃんのような脳内にお花畑が広がっている人にはわからないでしょうけど、この世には式や披露宴に十分な人員を呼べない人というのもあるのよ」

と言った。

「たとえば事情があって親きょうだいと断絶しているとか、過去の友達を呼べないわけがあるとか、もしくは転校が多かったり、いじめられたりで友達がいないとかね」

「ははあ」

「もちろんそれを正直に結婚相手へ打ちあけられる人もいるわよ。でも全員が全員そうじゃない。だいたい結婚前なんて、みんな相手には最高にいい格好したいと思ってるときでしょう。相手の御両親や親族に対してなら、なおさらよ」

香耶は声を低めた。

「はい、ここでお姉ちゃんも想像してみてください。十八年間の念願かなっ

て、ついにシロちゃんと結婚できることになったとします。想像した？」

「し、しました」

正座して居住まいを正し、咲希は答えた。香耶がうなずく。

「よろしい。ではさらに想像してみて。過去に不幸な事故があつて、あたしたち側の親戚は九割がクリームパンになっているとします」

「クリームパンに」咲希は息を呑んだ。

「それは困ります」

「でしょう。シロちゃんとシロちゃんの御親族の手前、クリームパンを招待するわけにはいかないし、はたまた親戚が九割クリームパンだなんて知られたら、嫌がられて破談になる可能性が濃厚です。

さてこの場合、お姉ちゃんはどうしますか」

「親戚役をしてくれるサクラを頼みます」

「大正解。——というわけで俗世ぞくせにはこの手のバイトが存在し、かつそれなりの需要があるわけよ。おわかりか？」

「おわかりです」

咲希は大きく首肯しうけんし、

「でもなんで、そのバイト話をわたしに？」

「一つは派遣会社が出した条件が、『容姿端麗』だってことよ。次に『衣装メイク要相談』って書いてあるけど、実際はたいした貸衣装

はなくて、結局みんな自前の服で参加してるらしいって先輩から聞いたこと。お姉ちゃん、一時期パーティドレスみたいな派手な服はつか買ってたけど、ぜんぶ箆箭たんすの肥やしになってるでしょ。こんなバイトでもしない限り、生かす機会ないでしょう」

そこで香耶は大きく息継ぎをした。

「三つ目には、あたしはいま大して欲しいものがないし、いまのうち早めに単位を取っておきたいからバイトする意欲がないこと。そして最後に『ブライダル業界に夢を抱く方、大歓迎』って、このパンフにでっかい謳い文句があるってこと。……以上のもろもろを考えあわせまして、あたしよりお姉ちゃんのほうが、このバイトに適役であると判断した次第でございます」

「……はあ、なるほど」

妹の勢いに気圧けおされ、咲希は思わず首を縦にした。

「でもこの派遣会社、大丈夫なの？ パンフの時点で胡散うさんくさいんだけど」

「そこは大丈夫みたい、先輩自身が二年やっていたバイトだから。ゼミがはじまって忙しくなるから辞めざるを得なくなっただけで、バイト自体はおすすめだって言ってた」

「ふうん」

「まあ気が向いたら電話してみてよ。あ、ヤンマガ返すね。次お風

呂どうぞ」

「うん、ありがとう」

咲希は部屋を出ていく妹に生返事をし、パンフレットをいったん閉じた。そして数分置いてまたひらき、端から端まで熟読した。

おもむろに彼女は立ちあがった。

クロゼット兼押入れを開けはなつ。ハンガーに掛けられた、着ていく場所も機会もない華やかな服の群れをしばし凝視する。

結局、彼女はその派遣会社の電話番号をスマートフォンに登録しておこうと決めた。パンフレットは、通勤用のトートバッグにしまった。

そのパンフレットが咲希の手によってバッグから取りだされ、スマートフォンから該当の電話番号が発信されたのは、翌日の昼休みのことであった。

3

大安吉日の日曜日。

咲希はバーティドレスにレースのボレロ、クラッチバッグといういでたちでホテルのロビーに立っていた。

早くも不安が押し寄せている。胸の鼓動こどうが速い。これは学生時代

に経験したお中元の包装や、ファストフードのバイトとはわけが違う。

なにしろ披露宴に出席するのは、中学時代に従姉いとこが結婚したとき以来なのだ。こんなお高いホテルに足を踏み入れることも不慣れであった。友達が多いが、皆彼氏がいたりいなかったりで、まだ誰もゴールインには至っていない。

——勢いで来ちゃったけど、わたし、このドレスで浮いてないかしら。

マナーなんて「白NG、肩出しNG、ミュールNG」くらいしか知らないのよね、とあらためて己の服を見おろしてみる。

初回だし様子をみようよと、とりあえずドレープやフリルの少ないネイビーのドレスを選んでみた。ウエストの絞りにビジュアをあしらっただけのシンプルなデザインで、丈は膝までだ。アクセサリーは真珠ベースにしておいた。髪だってアップに結ったし、きつと無難にまとまっている……と思いたい。

——駄目だ、もう一回鏡見てこよう。

咲希は足早に化粧室へと向かった。

ホテルの化粧室ならば、たいい姿見があるはずだ。ついでにメイク直しもしてこよう。こんなに緊張するのは久々だ。中学二年の夏、はじめてバレー部のレギュラーとしてコートに立ったとき以来

かもしれない。

化粧室には先客が一人いた。

鏡に映る先客の顔を見て、

——あ、美人。

と咲希は真つ先に思った。

くつきり欧米顔の咲希とは正反対に、どこか雛人形ひなにぎようを思わせる清楚そな和風美女である。肩下までの黒髪が艶つややかだ。裾がバルーン型になったスモーキイピンクのドレスが、色白の肌によく似合っている。

なんとなく咲希が気後れしていると、お雛様は顔にパウダーをはたきながら、

「ねえ、もしかしてあなた、合路さんじゃない？」

と鏡越しに問いかけてきた。

咲希は驚きつつ、おっかなびっくり返答した。

「え、あ、はい……。そうですが」

「やっぱりね。よかったあ、美人で」

お雛様が体ごと振り向き、右手を差し出してくる。

「あたしも例のサクラ会社から派遣で来てるのよ。澤石百合香さわいしゆりかとい
います、今後ともよろしくね」

「へ、こちらこそよろしく」

目を白黒させながら、咲希は意外にフレンドリーな百合香と握手を交わした。

百合香が優雅に微笑んで、

「新婦によっては『自分より美人なサクラはNG』って言う人もいるけど、今日のは大丈夫よ。目一杯華やかにしてくれって注文だったらしいから」

「へえ、そうなんだあ」

咲希は気の抜けた答えを返した。

次いではっとし、小声で百合香に尋ねる。

「ねえ、わたしのこの格好どうかな。どこかまずいところがあったら教えてくれない？ いまのうち直しておくから」

百合香は上から下まで咲希をとっくりと眺めまわし、

「うん、いいんじゃない」

と首肯した。

「でも合路さんのその顔立ちだったら、もっとゴージャスなドレスでもよかったかもね。——って、これはあくまで『今日は』の話よ。さっきも言ったように、『あたしが主役よ！ 主役より目立つな！』ってタイプの新婦もいるわけだし。ってというか、むしろそっちのほうが多いんだからさ」

あはは、と百合香が大口を開けて笑う。

その様子に、咲希は緊張がゆっくり解けていくのを感じた。

おとなしそうな見かけによらず、さばさばして話しやすい子だ。

それに一人じゃないというのはなにかと心強い。この調子なら、訊けばなんでも教えてくれそうである。

「澤石さんはこのバイト、長いの？」

メイク直しに戻った百合香の隣に並び、同じくルースパウダーをバッグから取り出して咲希は尋ねた。

「んー、それなりにかな。でもけっこう面白いよ。綺麗な服着てお出かけできて、おいしいものが食べられて、愉快的イベントが見られるいいバイトって感じ」

「愉快的イベントって？ 友達の余興とか？」

「違う違う」

百合香は笑った。

「こういうこと言っちゃなんだけど、やっぱり普通とは違う感じの式や披露宴が多いのよね。もちろん同情しちゃうような事情でサクラを頼む人もいるけどさ、八割はサクラに頼らざるを得ないくらいに友達のいない女が新婦、ってケースなわけよ。友達が「少ない」ならまだしも、友達が「いない」やっつて、男女の区別なくたいがいはいは地雷でしょ」

「地雷」

咲希は平たい声で繰り返した。

百合香が苦笑する。

「癖がある人間ってこと。どこに地雷の撃針げきしんならぬ逆鱗げきりんがあるかわかんなくて、踏み抜いたらドツカーンてやつね。まあそんな輩やからが挙げる式だから、一筋縄ひしじなわでいかないことも多いわけ。でもいちいち戸惑ってたらサクラなんか務まらないから、合路さんも割り切って楽しんでほうがいいわよ」

「ああ、うん」

圧倒され、咲希は呻いた。

「なんか……すごいね」

百合香がビューラーで睫毛まつげをカールさせながら、

「うちはトラブルを厭いとわず受ける会社だから、とくに变なのに当たりやすいかもしれないね。その代わり事前につちり契約書は交わすらしいわよ。今年で創業八年目だけど、訴訟沙汰そしやうざたは両手の指で足る数らしいわ」

はたしてそれは多いのか少ないのか——と咲希がいまひとつ相槌づちを打てずにいると、百合香がスマートフォンスマートフォンの時刻を確認して声をあげた。

「あ、もうこんな時間。やばい、行かなきゃ」

百合香の先導に従い、咲希はエレベータに飛び乗った。

会場は二階である。すでに新郎新婦のみで海外挙式済みだそうで、今日は披露宴だけの出席だと事前に派遣会社から連絡を受けていた。

「あたしたちはここよ」

と百合香が指さしたのは、新郎新婦が立つ高砂たかさからもっとも遠い席であった。咲希がおそろおそろ訊く。

「……ここつてもしかして」

「そう、御新婦様の親族席」

百合香はあっさりとうなずいた。

会場に円卓は八つ用意され、それぞれに六人ずつの椅子が用意されている。咲希が茫然自失ぼうぜんじしつしているうちに、その円卓はすこしずつ招待客で埋まっていった。

主賓しゅひんが座るのだろう中央のテーブルにはいかにも貫禄ある初老の夫婦が座り、友人席にもそれぞれ、華やかな装いの女性やスーツ姿の男性が着いていく。

しかし新婦側の親族席には、百合香と咲希のほか誰も来る者はなかった。

「御両親は？」

咲希は百合香に身を寄せ、ささやいた。

見れば新郎側の親族席には、両親らしき中年の男女がおさまって

いる。

友達がいないのではなく、天涯孤独てんがいこどくの新婦なのだろうか。しかしそれにしたって、両親役がないのでは様になるまい。それに自分はいつたい、どういう係累けいるいとしてこの席に座らされているというのか――。

百合香がささやきかえしてきた。

「今回、新婦側両親の役どころはなし。いるとかえって不自然だろうからっていう、クライアント側の判断ね」

「不自然？」

「ちなみにいまここにいる招待客の、九九パーセントがサクラよ。あそこの主賓席に座ってる夫婦だけが本物。あとはみーんなサクラか、もしくは劇団員」

「は？」

どういうこと、と咲希が問いかえそうとしたとき、ぱつと照明が落ちた。

顔を向けると、司会らしき女性がマイクを前にしてピンスポットを浴びているところであった。慌てて咲希は居住まいを正した。

「たいへん長らくお待たせいたしました。これより新郎新婦が御入場なさいます」

妙に芝居がかった声音で司会が告げる。

「では御入場口に御注目ください。新郎新婦、御入場です。皆様ど

うぞ、盛大な拍手でお迎えを！」

ムーヴィングライトが入場扉を照らしだした。

ケルティック・ウーマンの『アヴェ・マリア』が流れる中、手に手を取りあつて、純白のタキシードとドレス姿の新郎新婦が進み出てくる。

「御新郎様、御新婦様、おめでとうございます！ 愛しあうお二人がメインテーブルにお揃いです。どうぞ皆様、一段と大きな拍手をお願いいたします！」

司会が声を張りあげた。

つられるように拍手しながら、咲希はなかば口を開けて新郎新婦を眺めていた。

スポットライトを浴びた新郎は、暗がりを通り過ぎていったシルエットから想像したとおりの人物だった。二十代前半といったところだろうか、痩せぎすで、ちよつと気が弱^やそうで、満面に笑みをたたえていかにも嬉しそうだ。

そして彼に寄り添い、すでに涙ぐんでいる新婦は――。

さつきはヴェールに顔が隠れていて気づかなかつたが、こうしてライトを浴びてしまうと隠しようがない。

どう見ても、五十代なかばであった。

親子ほどの年齢差、いや、まるつきり親子に見える。

主賓のテーブルでは、ただ一組サクラではないと百合香が説明した夫婦が、さかんに拍手をしていた。

そして祝辞を送る主賓もまた、当然のようにその夫婦の片割れ、

つまり夫であった。

なおおみ

つねこ

「直臣くん、恒子さん、このたびはまことに御結婚おめでとうございます。このようなおめでたい席にお招きいただいたこと、たいへん感激に思っております……」

ハンカチで目を拭って、

「思い起こせば二十二年前、恒子さんが不幸な事故で、前の御亭主を亡くされたのもこんな初夏の頃でした。以来恒子さんは彼の面影を胸に抱きながら、女手ひとつで子供たちを育てあげ、たくましくも誇り高く生きてきたのであります。」

彼女は優秀な教師として、今年で勤続三十一年になります。あふれる熱意、高い責任感と使命感、豊富な知識、ときに厳しくときに温かい指導。彼女はわが校において、なくてはならない存在であります。教鞭を執るその凛々しい姿に、その頃高校生であった直臣くんが憧れを抱いたのもむべなるかな——」

感きわまったのか声を詰まらせる主賓を、咲希はぼかんと見守るしかなかった。

百合香がささやいてくる。

「あの主賓夫妻も教師らしいわよ。私立高校で、新婦の同僚だって」
「はあ」

「聞いてのとおり教え子の新郎が、当時担任だった新婦に惚れちゃつて、猛アタックの末口説き落くどとしたらしいわ。一応社会人になつてから付きあい出したつて話だけど、どこまでほんとだか」

と肩をすくめて、

「そんなわけなんで、新郎の両親も新婦の子供たちも、揃って大反対の結婚なのよ。まともな参列者がほとんどいない理由がわかつたでしょ」

「わかつた……」

力なく咲希は相槌を打った。

それにしてもあの主賓、しょっぱなから忌み言葉の連発だったが大丈夫なのだろうか。いくらなんでも『不幸』『事故』のNGワードに、前旦那の話題からはじめるのは無しだと思ふのだが。

そう心配する咲希の心も知らず、主賓の男は気持ちよさそうにスピーチをつづけていた。彼の言葉に新婦は泣きじゃくり、新郎はこの世の春といったふうに絶えず微笑んでいる。

呆あっけ気にとられつづける咲希をよそに、披露宴は肅々しやくしやくと進行した。
「はじめての共同作業です！」

とのお決まりの台詞とともにケーキ入刀が為なされ、お色直しのた

め新郎新婦が退場する。

「皆様しばらくの間、お食事を召し上がりながらご歓談ください」
との司会の言葉で、一斉に招待客がフォークとナイフを手に取る。

百合香がフルートグラスのシャンパンを豪快に呷って、

「あ、言い忘れてたけど、あたしと合路さんは新婦の娘っていう設定だからね。あとで『新婦から母への手紙』ならぬ『娘から新婦への手紙』コーナーがあって、合路さんに読んでもらう予定だから心しておいて」

「えっ、ちよっつ、そんなの聞いてないんだけど」

咲希は声をあげた。

百合香が「まあまあ」と彼女を手で制する。

「まあ落ちついて。大丈夫だって。手紙はとくに用意してあるし、ただ前へ行って読みあげるだけだから。え、初見で読めるかって？ いいのいいの。ちよっとくらいトチったほうが、かえって本物らしく見えるっつもんよ」

言葉を失う咲希の背後で扉が開き、映画『タイタニック』の主題歌が流れ出した。

入ってきたのは無論、お色直しを済ませた新郎新婦である。

新郎は白タキシードのままだが、新婦は玉虫色のプリンセスライ
ンのドレスをまとっての登場だ。頭にはしっかりとスワロフスキー

のティアラまで着けていた。

さすがに恥ずかしいのか新婦は顔をそむけがちだ。

だがその耳へ、新郎がふつと顔を寄せた。

なにをささやかれたかは当然咲希たちには聞こえない。だが新婦が意を決したように、はじめて毅然と顔をあげるのがわかった。

その刹那、咲希は思わず手にしたフォークを取り落としかけた。

咲希は激しく胸を打たれていた。

新婦の目には、覚悟と漢気とが満ちていた。いまはじめて肚が据わった、と言いたげに、彼女は顎をあげて挑戦的に会場を眺めまわしさえした。

司会が拍手をうながす前に、われ知らず咲希は腰を浮かして手を叩いていた。

新婦がこちらを見て、かすかににやりとする。堂に入った笑みだった。恒子さん素敵！ と叫びたいのを咲希はこらえた。

その後はサクラ丸出しの友人たちから歌やダンスが披露され、二度目のお色直しがあり、『株式会社チェリーブラスサム』からの祝電が読みあげられた。

やがて司会がおごそかに告げた。

「えー、宴もたけなわではございますが、それではここで御家族様より、御新婦様に宛ててのお手紙でございます。皆様、どうぞ御静

聴をお願いいたします——」

スタッフの合図によってすでに高砂の脇へ控えていた咲希が、マイクの前へ歩み出る。渡された手紙を広げ、彼女はすでに潤みつつある目で文字を追った。

「お母さん、今日はほんとに……ほんとうに、おめでとう……」

語尾が涙でぼやけた。

「おじつを言うと、今日この会場へ来て、この場所に立つまで、不安でした。直臣さんが、お母さんを幸せにしてくれる人なのかどうか……でも二人の幸せな様子を見て……そ、そんなのは、つまらない杞憂きゆうだったと悟りました……」

咲希は涙はなを啜くって、

「お母さん、いままで大切に育ててくれてありがとう。でも今日でお母さんはわたしたちのお母さんではなく、直臣さんのお嫁さんになるのですね。さ、最後の最後まで、覚悟ができてない娘でごめんね……ほ、ほんとうに、素敵な披露宴でした」

顔をあげ、新郎新婦へ向きなおった。

新婦が驚いたように彼女を見つめてくる。最後のアドリブがわかっただが、かまわず咲希はつづけた。

「今日のこの場にいられたことを、光栄に思います。二人ともとて

も、お幸せそうで——いつかわたしも、こんなふうには、お二人のよ
うに、心から幸福と思える、そんな御式をしたいと——あ、憧れま
した。素敵でした」

新婦の目から涙があふれた。

新郎がそんな彼女の肩をやさしく抱く。

ああ、いいなあ、と咲希は思った。わたしのときもあんなふうには
シロちゃんに抱き寄せてもらいたい。

わたしが泣いたら、シロちゃんは直臣さんみたいに指で涙を拭っ
てくれるかしら。でも彼、照れ屋だからなあ。というか子供の頃、
わたしが転んでも気づかずに猛スピードで走り去って行っちゃった
よね。一五キロ先の目的に着いてはじめて、わたしがいないって気
づいたんだよね。でもいいの。そんなまつすぐなシロちゃんが好き
よ。

そう胸中でつぶやいているうちに、彼女の激情は頂点まで高まっ
た。

咲希は声を張りあげた。

「い、いつまでもそんな、わたしの憧れのお二人でいてください。
十年先も、二十年先も、どうかお幸せに——。今日はほんとうに、
すごくすごく、ありがとうございます。感動でした。いいもの見
せてもらいましたあ」

そのあとと言葉にならなかった。咲希は顔を両手で覆い、号泣した。

派遣会社から電話があったのは翌日の午後だった。

「いやあきみ、大活躍だったらしいじゃないの。よかったわよ。クライアントに大好評よ」

株式会社チェリーブラスサム専務の蔵野と名乗ったその男は、奇妙な抑揚の女言葉で咲希を手ばなしに誉めたたえた。

いまだ腫れの引かぬまぶたに咲希は冷えたタオルを押しあてながら、

「そんなことより、なんで事前に詳細を教えといてくれなかったんですか。知ってたら、もっと先にいろいろ準備できたのに」

と抗議した。

しかし蔵野は意にも介さず、

「澤石さんには知らせてあったから、べつに進行に支障はなかったでしょ。それに新人はなにより初々しいのが売りよ。事前に情報を与えすぎると、変に構えちゃってつまらないしさ。だいたい半年もやっているとみんなスレちゃって、きみみたいな新鮮な反応してくれなくなるのよねえ」

と笑っただけであった。

ああこれは言っても無駄な人種だ、と咲希は瞬時に理解した。過去にも何度か遭遇したことがある。他人がなにをどう訴えようと右から左へきれいに受け流して、平然と我を通してくる厄介な輩だ。

——やっぱりこのバイト、辞めようかな。

咲希は内心でつぶやいた。

確かに昨日の披露宴は感動した。だが百合香の話しぶりからして、面倒ごとのほうが多そうな仕事内容である。

第一この蔵野のような男が専務としてつとまる会社なんて、ろくなものではあるまい。本格的にトラブルに巻きこまれてからでは遅い。

「あの、わたし」

このお話はなかったことに——と言いかけた咲希をさえぎって、「ああ、いいのいいの。よけいな謙遜けんそんとかいらぬから、その調子で次もお願いね。クレームが付かないだけでもありがたいのに、クライアントから即行で感謝の言葉がいただけるなんて、うちにしちやめずらしい案件よ。日当のほかにボーナスも弾んでおいたから、早目に通帳を確認しといてね」

と蔵野がまくしたてる。

思わず咲希はスマートフォンに耳を寄せなおした。

「え、ボーナス？」

「ええそうよ。じゃあね。期待してるから、次も頑張ってちょうだい
いな」

言うだけ言って、ぶつりと通話は切れた。

翌日、咲希は派遣会社の給与振り込みに指定した、普通預金口座の残高を警戒しつつも確認してみた。そして目を剥いた。

契約どおりの日給プラス、倍額近いボーナスが朝一番で振り込み済みであった。

咲希の喉のどがごくりと鳴った。

——これは結婚資金、意外と早く貯まるかも。

即座に咲希はその通帳を、脳内で『ウェディングロード専用口座』と名づけた。そして浮き立つ気分を顔に出さぬよう、頬の内側を噛みながら、颯爽さつそうとヒールを鳴らして銀行の自動ドアをくぐった。

バイトを辞める気は、とうに雲散霧消うんさんむしりょうしていた。

4

蔵野が電話で言った「次」は、早くも翌週末に訪れた。

場所は老舗のブライダル会館『青扇殿』である。少なくとも築四十年は経つはずだが、どこもかしこも豪華できらきらしく、ホテル

とは一味違った“和”の空気に満ちている。

滝が流れ、手入れのいい芝が緑の絨毯じゅうたんを成す日本庭園には緋毛氈ひもうせんが敷かれていた。

昔ながらの神前式か、もしくは近ごろ流行りはやりの人前式かコースを選べるらしい。だがどうやら今日は神前式のようなだった。白木の八脚案や、御神鏡だの祓串はらいぐしだのがとうにセッティング済みである。

「いいわあ、素敵……」

ロビーのガラス越しにその眺めを見おろしながら、咲希はうっとりした。

六千坪あるという触れ込みの日本庭園はいま、いかにも初夏らしい碧羅へきらに包まれていた。涼しげに滝が降りそそぎ、水蓮が咲く池の水面に、木々が反射して美しいシンメトリーを描いている。

椿の木が池を囲むようにして手前にぐるりと植わり、その後ろにはすでに葉桜と化した染井吉野や大山桜の木が並んでいる。

さらにその背後には、大紅葉おおもみじ、小檜こなら、瓜膚楓うりはだかえや、白木しろき、板屋楓いたやかえで、桂かづら、五葉躑躅ごようつづじ、橡とちの木、山法師やまぼうしなどの落葉樹が幾層にも植わっていた。

いまはどの木も緑葉を輝かせているが、春には桜が咲き誇り、秋には赤に黄に橙だいだいに色づく紅葉が楽しめる。とくに秋の時期は連なる山々の紅葉ともあいまって、豪奢としか形容しようのない光景だ

という。

そのせいだろう、たいていの式場は五月から六月が一番人気であるが、ここ『青扇殿』は秋の予約が断トツであるらしい。

そのいい証拠が、咲希がへばりついている窓の横に貼られたポスターだ。紅葉あふれる庭園を背にした花嫁がにっこり微笑み、

『お母さんも、ここで挙げました。そして私も。』

というキャッチコピーをかぶせられている構図のポスターであった。

「そういえば従姉のユキちゃんも青扇殿で式を挙げたのよね。ちょうど秋で、紅葉まつさかりで。あれはよかったわ。いつかわたしも、あんなふうにここで……」

——この庭園で、シロちゃんと神前式を。

不覚にも奇声をあげそうになり、咲希はぐつと奥歯を食いしばった。

脳内でのみ「きゃあいやだ！ わたしったら気が早い！ やだやだ！」とはしやぎまわり、足をばたつかせておくことにする。現実世界でやったなら乱心したのかと思われ、両側から警備員に掴まれてつまみ出される可能性が大だったからだ。

ガラスに額を付けて咲希が荒ぶる思いを鎮めていると、

「……なにやってんの、合路さん」

と背後から呆れ声がした。

振りかえるまでもなくわかる。この声は澤石百合香だ。

咲希はぎぎぎ、と音がしそうなほど首の関節を軋ませ、彼女を肩越しに見やった。

「お、おはよう澤石さん。気にしないで。ただちよつと興奮を抑えようと……」

「興奮？ なんの興奮よ」

「中学生の頃からわたし、ここで式と披露宴を挙げるのが夢なのよ」

耐えきれず、咲希は体を反転させた。

「できれば紅葉の時期で、神前式で白無垢着て、披露宴では友達とか同僚とか上司から、雨あられと祝辞を浴びたいの。元部活仲間みんなにブライズメイドなんかやってもらって、フォトムービーとか流してもらって。花嫁の手紙読んで思いつきり泣いちゃったりして。それでわたしのお色直しはどうでもいいけど、新郎にいろんなバージョンのタキシードとか袴はかまとか着てもらって、その写真を永久保存版に」

「ふーん」

百合香は棒読みで応じた。

「ちなみにお相手はいるわけ？」

「いるー！」

咲希は鼻息荒く答えた。

「まだ付きあえてないし、告白すらしてないけどね！ でもいる。相手がこの世に存在することだけは確か！」

「へー」

と百合香は能面の表情を崩さず応え、

「ま、いいけどね。でもあんまり結婚に夢見すぎないほうがいいと、お節介を承知で一応言っておくわ。とくにこのバイトやっていると、人間関係だの裏事情だのに嫌気がさすことも多いしさ。ほかの国はどうか知らないけど、日本においての結婚って、必ずしも人間を幸福にするわけじゃない制度だと思わされちゃうのよね」

「なあに、それ」

咲希は思わず眉根を寄せた。

「どういう意味？」

「どうって言葉どおりの意味よ。——あ、時間やばい。あたし、ちよっとメイク直して来るわ。合路さんはどうする？」

「え？ あ、うん。わたしも行く」

慌てて咲希はうなずいた。

青扇殿の化粧室ことレストルーム、つまり女性用トイレはさすがに広くて綺麗だった。入り口の戸はもちろん、洋式便器の開閉や洗

浄も自動である。

一つ一つの鏡には、洩れなくシャンデリアタイプの照明が備わっていた。綿棒、コットンなどメイク直しに必要な道具の横には「ご自由にお使いください」のカードが添えてあり、いたるところに薔薇ばらのプリザーブドフラワーが飾られている。

全体的に和調なのに化粧室だけ洋風のゴージャスなのはなぜかしら、と咲希はどうでもいいことを考えながら、クラッチバッグを開けた。

百合香は奥で鏡を覗きこんでいる。

なんとなく距離をとるようにして、咲希は入り口近くの鏡を陣取った。

べつだんさっきの百合香の発言が気に障ったわけではない。むしろ、百合香のほうが気を悪くしたのではないかとあやぶんでいた。

——結婚に夢見すぎないほうがいいと、お節介を承知で一応言うておくわ。

——日本においての結婚って、必ずしも人間を幸福にするわけじゃない制度だと思わされちゃうのよね。

どうやら百合香は良妻賢母になりそうな見た目に反して、さほど結婚願望がないらしい。

前回会話したところによれば、普段は大手の保険会社で営業事務

をしているという。歳は咲希と同じく二十四歳だそうだ。

——でもまあ、めずらしくないか。

四、五十年前と違って、みんながみんな結婚するって社会じゃなくなつたもんね。男も女もどんどん独身率が上がって、少子化一直線の時代だし。

ちなみに咲希は結婚しても仕事は辞めないつもりだ。新卒で入社した医薬品卸会社は県内有数のホワイト企業であるし、業務内容にも不満はない。

光学機械メーカーで企画開発に携わっている史郎の給与と合わせれば、裕福とは言えぬまでもそこそこの暮らしはできるだろう。それで子供はできれば二人、いや三人でもいいかな——などひとりごちながら、咲希はわずかによれたアイラインを綿棒で修正した。

フェイスブラシでパウダーをさつと刷^はき、グロスを塗りなおしてから、一歩下がって顔全体の出来を確認する。

「ま、こんなとこかな……と」

ボレロの曲がり直し、衿^{えり}が傾いていないかを見る。今日は蔵野から、

「新婦がセレブリティでビューティな友達が多いところを新郎一族に見せつけたいそうなので、目一杯おしやれしてきてください」

とお達しがあったのだ。

それに応えて咲希は花びらのようなシャーリングやフリルがチユーリップラインを描く、カメラアピンのパーティードレスを選んだ。アクセサリーは上品で小ぶりな、リボンモチーフのピアスとネックレスである。

フェイスブラシとパウダーをしまつてバッグを閉じると、すでに百合香の姿はなかった。いけない、わたしも早く行かなきゃ、ときびすを返しかける。

こつ、と背後で音がした気がした。

反射的に咲希が振りかえる。

そして、凍りついた。

いっとう奥の個室から壁へ、女の片手がへばりついていた。

顔も、姿も見えない。ただ筋ばつてみやしや華奢な手だけが、肌色の大きな蜘蛛くものように壁に貼りついている。

咲希は悲鳴をあげかけ、声を呑んできつく目をつぶった。

三秒数え、まぶたをあげる。

白い手は消えていた。

咲希はほっと息をついた。よかった、やっぱり錯覚だった、と足早に化粧室を出る。

それにしたって、いったいなにを人間の手と見間違ったりしたん

だろう。それとも幻覚や幻視というやつだろうか。だとしたらわた
しって、自分が思っている以上に疲れているのかもしれない。

ロビーへ戻ると、百合香が怪訝な顔を向けてきた。

「どうしたのよ、へんな顔して」

「な、なんでもない」

咲希はかぶりを振った。

「もしかして、急に『なっちゃった』とか？ 鎮痛剤持ってるけど
いる？」

心配そうに覗きこんでくる百合香はスパニッシュローズのドレ
スに、アクセサリーをパールと天然石で統一している。これまた蔵
野の要望どおり華やかで、文句なしに場に映えるいでたちだ。

「ううん、大丈夫。ありがとう」

咲希はふたたび首を振った。

周囲のきらびやかな内装と百合香を見比べているうち、いったん
跳ねた心臓が急速に鎮まっていく。

忘れよう、と咲希は思った。

馬鹿馬鹿しい。この非現実的な空気に当てられてしまったとして
も、どうしてあんなホラー調の幻なんか見たのだろうか。

どうせならもっと綺麗な幻覚が見たかった、できればシロちゃん
の紋付袴姿とかタキシードとか、もしくは燕尾服——と胸中でぼや

く咲希をよそに、百合香が受付を親指で指し示す。

「今日は前回と違って、スタンダードに新婦御友人様の設定だからね。余興の歌、練習してきた？」

「あ、うん。ネットの動画観ながらだけど」

「充分よ。さ、受付に行きましょう」

受付には新郎側二人、新婦側二人がすでに揃って、にこやかに立ち働いていた。

咲希はクラッチバッグから袱紗ふくさに包まれたご祝儀袋を取り出し、受付の女性へと手渡した。

水引がハート型を描くこの袋は『株式会社チェリーブラスサム』から事前に配られたもので、中身は空である。

おそらくこの受付係もバイトなのだろう、心得顔で咲希に向かって微笑み、席次表と席札を差しだしてきた。

咲希は芳名帳にサクラ用の偽名を書きいれながら、さりげなく受付を観察した。

対ついでのウェルカムベアは会場に合わせてか、白い紋付袴はるきに白無垢をまとっている。ウェルカムボードは新郎新婦『悠貴・綺星きしほ』のインシャルだろうHとKに、白やピンクのペーパーフラワーをあしらった定番のデザインだ。

そしてベアとボードに挟まれるようにして、これまたハート型の

ワイヤーボックスにおさまった、サテン生地のリングピロウが飾られている。

「こつてこてね」

百合香が小声で言った。咲希はその腕を引つ張って、

「冠婚葬祭なんて、こてこてでいいのよ。ね、もう座ってましようよ。今日は友人席だから前のほうだもん。なんだか前るときより落ち着かない」

と訴えた。

披露宴はプロの司会により滞りなく進行していった。確か以前は地方局のアナウンサーだったような……と、芸能情報に疎い咲希でもおぼろげに顔がわかる男である。

咲希はインスタントカメラを構え、レンズ越しに高砂を眺めた。印象の薄い中肉中背の新郎は、新婦と「並んでいる」というより「つねにおそばに控えています」といった風情だ。

そして新婦はといえば、彼とは対照的に精気とエネルギーとをあたり一帯へぎらぎらと発散していた。

鶴と扇をあしらった真紅の色内掛を百キロ近いのではと思える巨軀にまとい、頭には花魁のごとく無数の簪を放射状に挿している。

ちなみにインスタントカメラは派遣会社から事前に渡され、「要所

要所でフラッシュを焚くように」と命じられたものだ。あとで現像するかは不明だが、これもまあ場の賑やかしとして必要なだろう。「それではこれよりお二人の手で、ウェディングケーキにナイフを入れていただきましょう」

司会が歌うように言った。

「御撮影をなさる方は、どうぞケーキの前へお進みください。お二人のウェディングケーキはなんと御新婦様の手作りで、材料から何からこの日のために半月前からこつこつと御用意なされたという、愛情とこだわりが詰まった逸品でございます」

「へえ」

咲希は声を洩らした。

「まめなのね。式と披露宴の準備しながらケーキもなんて、わたしにはとても真似できそうにないな」

「は？ あんた、なに本気にしてんのよ」

隣席の百合香が呆れ顔で言う。

「あんなの嘘に決まってんじゃない。あれはうちの会社で手配した有名パティシエのケーキよ。『三段にして！ ベリーたっぷりにして！ フェイクなしの全部食べられるやつにして！』ってそりゃあもううるさかったらしいわよ。蔵野さんが愚痴ってた」

「はー……」

吐息まじりの相槌を打つ咲希に、

「基本的になーんにも信じないほうがいいわよ、今日の披露宴」

と百合香は涼しい顔で言った。

「これからたぶん司会がなんやかや言うと思うけど、九分九厘嘘だから」

招待客にそう評されているとは夢にも思わないだろう司会が、いっそうテンション高く声を張りあげる。

「皆様、会場の入り口にございましたウエルカムベア、ウエルカムボードを御覧になっていただけただけでしょうか。じつはあちらも御新婦様と御友人様による、共同の手作りでございます」

「てことは、あれも？」

咲希がささやく。百合香は答えた。

「嘘よ」

「またさきほどの御式で、お二人の愛の証あかしである指輪が鎮座しておりましたリングピロウ。皆様お気づきのとおり、受付に飾られておりましたね。あちらの品も御新婦様の御友人様が、愛の門出に是非とも作らせてほしいと御申し出になられたそうで……」

「嘘よね？」

「嘘よ」

百合香はシャンパンを水のごとく干していた。

「あの新婦がいままでの学生生活で——というか小中高といろいろあったみたいで、晴れの場に呼べる友達なんか一人もないらしいの」

「いろいろって?」

しかし咲希の問いに百合香が答える前に、司会の声のボリュームが上がった。

「それでは御注目ください！ お二人のはじめての共同作業、ウェディングケーキ入刀です。おめでとございます！ 皆様、盛大な拍手をお願いいたします！」

宴うたげは来賓の祝辞、キャンドルサービスと、いたってスムーズに進んだ。

一度目のお色直しの間、咲希たちは他のサクラ要員とともに総勢五人で『バタフライ』を歌った。

新婦はなんと膝上二十センチのミニ丈ドレスで再登場し、一同の度肝どきもを抜いた。どうやらこちらはサクラではないらしい新郎友人が、

「……チョイスの意味はわからんが、とにかくすごい自信だ」

とくぐもった声で呻くのが洩れ聞こえた。

二度目のお色直しの場もたせには、新郎友人たちが作製したというフォトムービーが上映された。新婦の姿はごく終盤に一、二カット登場したのみで、他はすべて新郎の生い立ちや学生生活を語った

ものであった。

「新婦の家が去年火事になってね、アルバムが全部焼けちゃったらしいのよ」

完璧なマナーでフォークとナイフを使いながら、百合香が言う。

咲希は小声で問いかえした。

「当然それも嘘なのよね？ それってやっぱり、友達と写した写真が一枚もないから？」

「ううん、火事だけはほんとみたい。新聞によれば全焼だったらしいから、アルバムが燃えた云々も真実なんじゃないかな」

三度目のお色直しの際は、新郎の叔父だという初老の男がギターの弾き語りでビリー・ジョエルを熱唱した。

そして新婦はドレスというよりチュチュに近い、白鳥の首が体へ巻きついたデザインの超ミニで登場した。新郎友人席からはまたも「ドリフかよ」、「志村か」との呻きが洩れたが、周囲は皆聞こえぬふりを通した。

余談ではあるが新婦と対照的に、新郎のタキシードは一度もお色直しされることはなかった。

さらに余興を挟み、新郎新婦は四度目のお色直しのため中座した。司会が暗がりの中、ウエイトレスから山盛りの祝電を受け取っているのが見える。

咲希は精神的疲労を押し殺して、

「あれもどうせ仕込みでしょ？ あんなに届くわけないもんね？」

「だと思わ。余興もネタ切れみたいだし、お色直しの間がもたないからできるだけ読ませとこうって計画じゃないの」

司会が凝固した笑顔を一同に向けた。

「ではこの時間をお借りしまして、僭越せんえつながらわたくしが、お二人に届きました御祝いの電報を御紹介申しあげます……」

もったいぶった仕草で一番上の祝電を取り、広げる。

「えー、『華燭かしよくの典を祝し、お二人の御多幸と御発展をお祈り申し上げます。家が燃えたくらいじゃ懲こりないようですね。今度はキャンセルサービ……』」

司会が慌せて咳き込んだ。

「し、失礼いたしました。まことに申しわけございません。では次の御祝電を……、えー、『御結婚おめでとうございます。綺星さんのことですから、きつと明るく楽しい家庭を築かれることと思います。御自分だけが楽しい家庭を。一刻も早く御子さんができるのを祈っております。そのときこそ親の因果が子に報……』いやどうも、これまた御失礼を……」

さすがに新郎側の親族と友人がざわついている。

新婦の両親と親族は、顔面蒼白そうはくでうつむくばかりだ。あきらかに

異様な雰囲気である。

司会にいたっては、はっきりと度を失っていた。

「えー、『月夜の晩だけと思……』いや、『結婚おめでとう。綺星さんのおかげで、学生時代は悪夢でした。あなたに無理やり援交させられ……』いやいや、『わたしの妹も、草葉の陰から呪っ……』いやいやいやいや」

これにて電報の御紹介を終わります、と悲鳴じみた声をあげて司会が降壇した。

あとにはなんともいえぬざわつきと、重い戸惑いだけが残った。

「——え、こんなのあり？」

咲希は啞然あぜんと言った。

「ていうか祝電って、新郎新婦が事前にチェックしておくものなんじゃないの？ いいのを選んで二、三通だけ読みあげるのがお決まりでしょ？」

「と思うけどねえ。やっぱり『お色直しが長いから、片っ端から読んで』とでもリクエストして、チェックを怠おそったのかしら。それにしても司会も、律儀に読みあげてくれたもんだわね」

百合香なまあくびが生欠伸をしながら言う。

咲希はおろおろと周囲を見まわして、

「ていうかわたしたち、どうしたらいいの？ 友人役として、ここ

はなにかしらフォローしとくべき？」

「いやあ、いまさらなにやっても焼け石に水でしょ」

百合香は手を振った。

「べつにあたしたちバイトの落ち度じゃないから、知らん顔してりやいいのよ。それよりあの新婦、ドレスにお金かけたぶん、あからさまに料理ケチってるわよねー。これ伊勢海老じゃなくて甘海老よ。品数だってやけに少ないしさ」

この様子じゃデザートもきつとしよぼいわよ——と言いはなち、百合香はグラスに残ったワインを勢いよく干した。

5

つづけて同会場の夕の部で、咲希は三度目のバイトを経験することとなった。

今回の新婦の希望は「ゴージャスな女友達」ではなく「新婦より目立つことなく、ただし美しく知的な友人」だそうで、従業員に更衣室を都合してもらい、急いで着替える羽目となった。

二着目としては咲希はミッドナイトブルー、百合香はグレイのドレスを用意していた。百合香が服に合わせてストッキングを履きかえながら、

「そういえばさっきの披露宴だけど、蔵野さんから連絡が来たから、ついでに裏事情を聞いちゃった」

と言う。

「なんでも新婦の兄貴が地元じゃ有名なヤンキー……というかチンピラで、その威光をかさに着て、妹の新婦は学生時代にやりたい放題だったらしいの。同級生を恐喝きょうかくしたり、気に入らない子に無理やり援交させたり、裸の写真をネットではらまいたり、自殺をはかった子も数人いるとかなんとか」

「ひどい」

咲希は顔いろを変えた。百合香が首肯して、

「最低よね。でもその兄貴とやらはバイク事故で二年前に亡くなったそうなの。以来、後ろ盾だてをなくした新婦はさんざんみたい。報復の機会が来たとばかりに一家ぐるみで村八分にされて、回覧板さえ回してもらえなくなるわ、いやがらせの電話や怪文書が相次ぐわ、実家は不審火で全焼するわ——たぶんこの結婚は、姓を変えて地元から逃げるためでもあるんじゃないかな」

「そ、壮絶なのね」

ごくりとつばを飲んだ咲希に、

「ね。我が子のとばっちりを食ってるかたちの新婦両親はお気の毒だけど、これも子育てに失敗したつけてやつなんじゃない。こん

な話を聞くと、なんだか結婚だけじゃなく出産や育児まで怖くなつてきちゃうわ」

そう百合香は言い、脱いだストッキングをごみ箱へ放りこんだ。

「でも次の披露宴もなかなかうんざりみたいよ。いまのうち覚悟しといて、合路さん」

「ああうん。そんなこつたろうと予感はしてた」

と咲希はため息をついて、

「それより、さん付けじゃなくて呼び捨てでいいよ。サキでもアイジでも好きなように呼んで。会社でもないのに、いちいち他人行儀なのって面倒だし」

「OK」

百合香がにやりとした。

「じゃあこれからは咲希って呼ぶね。あたしのことも、今後は百合香って呼んでちょうだい。……ねえ、なんだかあたしたち、いいコンビになれそうじゃない？」

次の会場に向かうべく、二人は肩を並べて更衣室を出た。

〈つづく〉